

父母から受け継いだ「身体」を大切にできる心が安全運転に通じる

テレビが生んだおはなはん通り

さて、あと少しだけ大洲自慢の話題で我慢していただきたい。1966年（昭和41年）4月から1年間にわたってNHKが放送した朝の連続テレビ小説「おはなはん」は平均視聴率が45%を超えるという超人気番組となった。

随筆集「おはなはん一代記」は、それまでもNHKで単発のドラマになったことがあり、そのときに主演をつとめた森光子さんが朝の番組でも主役を演じることにきまっていたのだが、急に体調を崩され、当時、劇団民芸の若手女優だった榎山文枝さんが起用されたということである。

原作のモデルは徳島市なのに、テレビ

ではなぜ大洲が舞台になったのか。徳島には時代背景に合った街並みや住居が見当たらなかったのと、地元があまり協力的でなかったというところで大洲がロケ地を選ばれることになったらしい。その結果、この「すり鉢の底」の小都市が毎朝のように全国の茶の間に紹介され有名になった。あとになって徳島では「しまった」とばかり、後悔しきりだったそう。大洲には今でも観光名所の一画となった「おはなはん通り」が健在であり、番組から名をとった銘菓なども売られている。

お国自慢の最後に大洲とゆかりのある人物、江戸初期の学者として名高い中江藤樹の名をあげさせていただきたい。通称は与右衛門、今日の平均寿命からみればまだまだ若い盛りの40歳（1608）

48)で没した人であるが、日本における陽明学派の始祖として、また周囲を徳化した稀にみる人格者として「近江聖人」の名で慕われた儒学者だ。

近江の国高島郡の生まれで米子城主の加藤家に仕えていた祖父の養子となり、加藤家の転封に従って大洲へ移り住んだ人である。若くして非凡な学才を謳われると同時に17歳から郡奉行として藩に仕え、次第に重要な藩政に携わるようになっていたが、20歳代の終わり、一人郷里で暮らす母親への孝養の念やみがたく引退を願ったという。

孝行は学問の基本 近江聖人徳ぶ旧居

中江藤樹の学問の基本は、一口にいうと孝養の徳であるとされている。父母へ

の孝心を人格の練磨と教養の形成において第一としたのが藤樹の思想であった。「わが心の孝徳明らかかなれば神明に通ず」という言葉とともに、高弟の一人である熊沢蕃山から、学問をすることの意味を問われた藤樹が、「一言「孝」と答えた」という話は有名である。

引退を願ったものの、藩からの許しはなかなか出ない。やむなく脱藩のよう

中江藤樹



絵・市川興一

なかたちで近江へ戻ることになったと伝えられていて、大洲藩ではそれを黙許したという。母のもとに帰った藤樹は、大洲から後を慕ってきた学問の同志をはじめ、近隣の人々を相手に身分や貧富を問わず教養の座を開いた。今もその講話の内容が学問的な著述とともに問答形式の書となって残されている。藤樹という名は塾の近所（庭前ともいう）に藤の古木があったところから付けられたらしい。大洲時代の住居跡は現在も県立大洲高校の構内に「至徳堂」として残され、大洲藤樹会という有志の会も存続している。

命の尊さを知る 父の経営理念

私もから少し上の修身教育を受けて育った世代の人たちは、子供のころから孝経や小学など中国の古典から引いた次のような章句を暗唱させられていた。「身体髪膚（しんたいはいつぶ）全てこれを父母に受く、あえて毀傷（きしょう）せざるは孝の始めなり」というリズム感のある言葉である。「両親から受け継いだこの尊い身体、生命を大切にすることが親孝行の第一歩である」というこの教えの意味を考えると、私は交通事故を起こさない安全運転の基本思想に深く通じる徳目だということを感じずには

ところで、私が生まれて間もない頃に召集された父はフィリピン方面の戦線に連れて行かれ、過酷な戦況のなかを生きのびて帰還してきた。父が所属した部隊の約300人の兵士のうち、命を取り留めた人はわずかに3人か4人にすぎなかったと聞いたことがある。その父も極端な栄養失調のうえに背後から貫通銃創を受けて倒れ、傷口にはおびただしいウジ虫がわきまさに瀕死の状態にあったらしい。意識もなくなっていたところを米兵に発見され、すでに死んだものとして遺体の収容場所に置かれようとしたところ、かすかに体が動いたことに気がつかれ急ぎよ手当てを受け回復したというのだった。

極限の飢餓状態と砲弾の嵐のなかで多くの戦友の死を目の当たりにしてきた人間らしく、父はどこか胆（はら）の座った人のように見えた。縁あって生かされることになった自分の命の尊さと役割を感じていたのではないかと思う。口には出さなかったが、父の生き方にはあまり「私」というものがなく、会社の経営にしても社員や周囲のために役に立つことが大切だという理念を持っていた。そんな父だけに、平和な時代にあつて事故などで命を落とすようなことがあつてはならぬと考えていたのである。（続く）



小林哲之（こばやし さとし）さんのプロフィール
1942年（昭和17年）愛媛県大洲市生まれ。愛媛舗道株式会社社長。大洲高校から麻布獣医科大学（現・麻布大学）に進み65年卒業と同時に父君が創業し経営する愛媛舗道株式会社に入社、83年社長となり今日に至る。早くから交通安全の重要性に目を向け81年大洲安全運転管理者協議会会長に就任（在任25年）、89年愛媛県安全運転管理者連絡協議会副会長（同12年）、2001年より会長（同5年）をつとめ、愛媛県高速道路交通安全協会副会長（同5年）なども歴任した。事業所の運転管理を中心に地域社会における安全活動の推進力となつて強いリーダーシップを発揮し、その功勞により2005年春の第45回交通安全国民運動中央大会においては全国優良安全運転管理者協議会の代表として表彰状を受けた。

愛媛県大洲市 愛媛舗道株式会社社長
小林 哲之